

おこうはん石造物群の調査報告

東かがわ歴史研究会

はじめに

「おこうはん」は、国道 318 号沿い白鳥西山兼弘の長川氏宅東向かい、南北にのびた丘陵頂部分にある。

318 号線がない頃は、すぐそばを流れる湊川支流沿いにあった 3 尺道と、さらに西の山際にそった道の 2 本があり、それが途中で合流して鶴ノ田尾へ通じていた。ちょうど谷を形成した東の高みの部分に「おこうはん」は位置している。

長川さんによれば、「おこうはん」と呼ばれる頂上部分には、清房集落の人達によって「山の神さん」が祀られていたという。お参りに不便を感じて 20 年程前、ご神体は清房集落に下されたが、祠堂は壊されずに長く残っていたらしい。

「おこうはん」と何故呼ぶのか、どういう謂れがあるのか今は一切伝えが途絶えてしまっている。ここから西の若王寺や、東の宝光寺、南の八坂さんなどとの関連はどのようなのだろうか。

渡瀬家の持山だった事、それを近年 2 軒が引き取ったことは判然としているが、そのいずれも「おこうはん」に所縁がないようである。

東かがわ歴史研究会は、2 軒の持ち主にお断りして、ほぼ 1 年をかけて調査を実施した。

山全体雑木が繁り、頂上部も深い羊歯だったが、刈り込んでみると火山石の五輪塔がころがった状態でいくつも現れた。

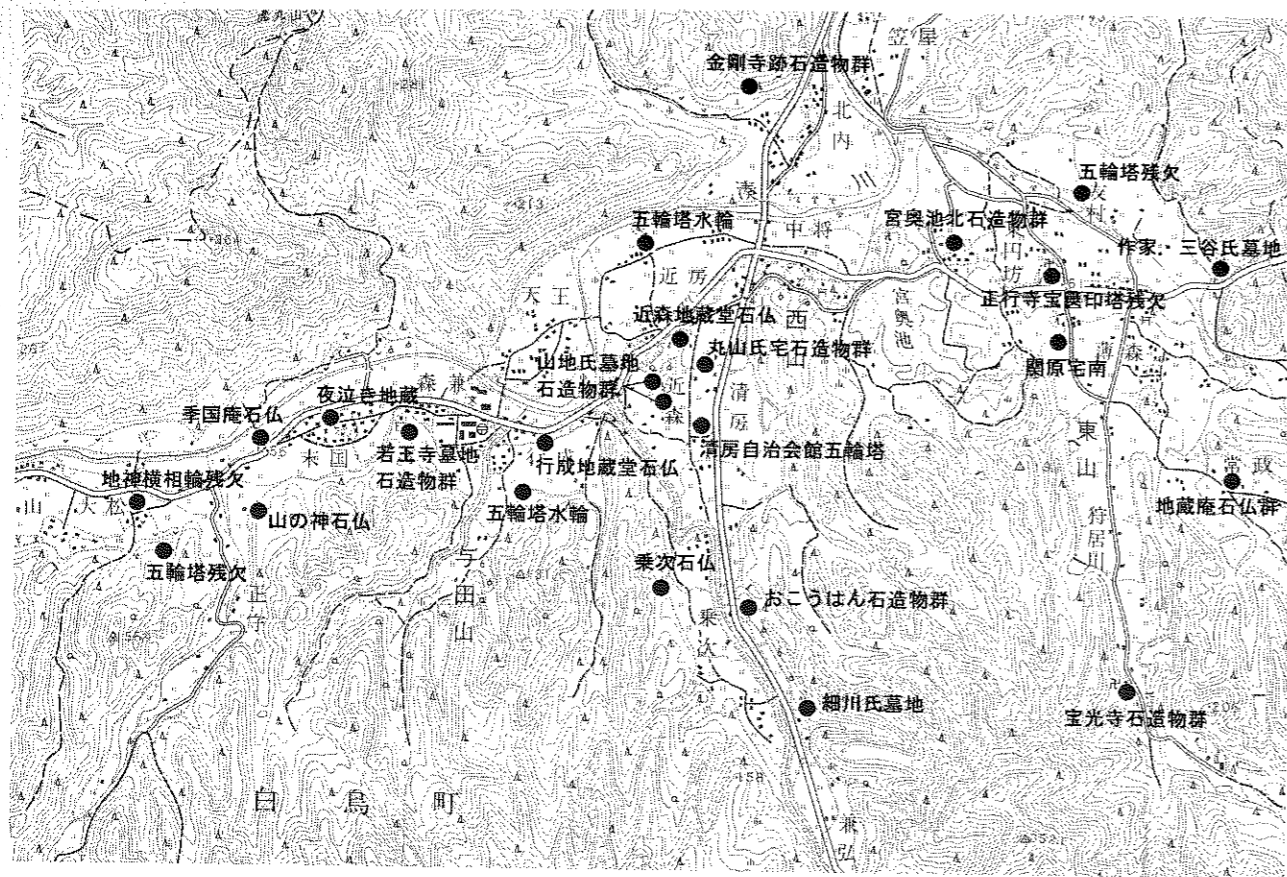
正しく組まれた状態ではなく、崩した後、再度拾い集めて無秩序に積み上げた状態が見て取れた。石造物は全て中世段階で近世以後のものは見当たらなかった。この時期になんらかの事情で廃棄されたと考えられる。それから現在まで 400 年。考古学的なメスが入ろうとしている。

(文責 木村篤秀)

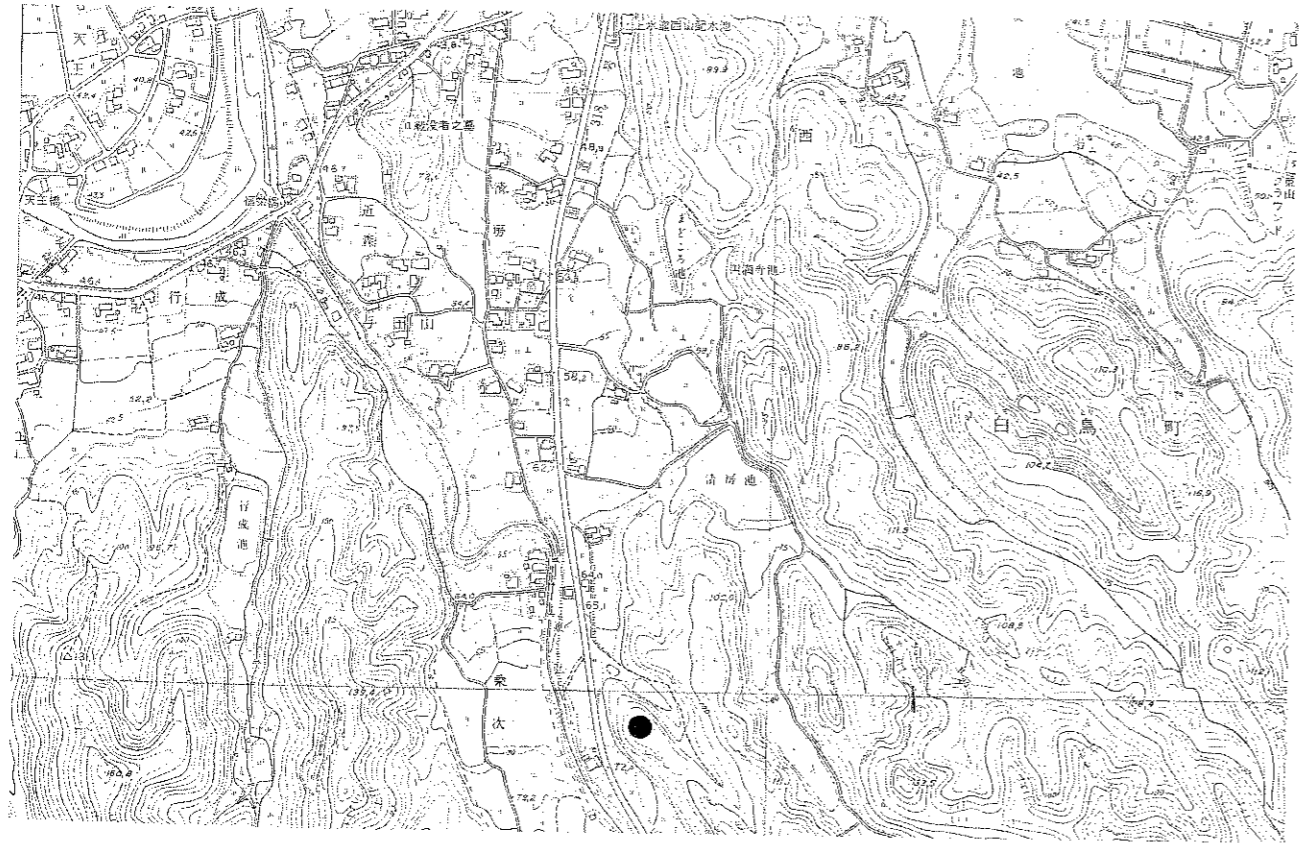
1. 調査の経緯と経過

おこうはん石造物群は平成 19 年 (2007) に若王寺所蔵大般若波羅蜜多經調査に伴って山西仁氏と松田朝由が周辺地域の中世石造物分布悉皆調査を実施した時に確認した。雑木のため正確な数は分からなかったが、五輪塔、宝篋印塔など複数の中世石造物の残欠が確認された。これらは尾根上に位置することから、周辺地域から集めてきた可能性は想定しがたく、本来的に当地に造塔された石造物群と考えられた。そして、中世墓地在広がっている可能性が高まってきたのである。

石造物群が位置するのは尾根上であり、西及び北側に平野を見下ろすことができる。現状は雑木のためかろうじて中世石造物の点在が確認できる状態であった。そこで調査は雑木の伐採から開始した。当初は本来の組み合わせを保った石造物が原位置で検出される可能性を予測したが、明らかになってきたのはバラバラになって集積された残欠群であった。しかし、その量は当初の予測をはるかに上回り、多量の残欠を確認するに至った。



第1図 周辺の石造物群 (1/50000)



第2図 おこうはん石造物群の位置 (1/10000)

そこでこの残欠について実測調査を実施することとした。また、平成25年(2013)4月21日の調査では伐採を進めていったところ、五輪塔地輪が等間隔で並んでいる箇所を発見し原位置を留めている可能性が浮上してきた。このように伐採によって多くの情報を得ることができたが、土中の事例も少なからず想定される。そのため本稿での報告はおこうはん石造物群を網羅するものではないが、確認した点数は90点を超え、うち88点については実測を完了した。この数はおこうはん石造物群のかなりを占めると予測され概要を知るには十分な数と判断した。本稿では今後の調査の基礎作業としてこの88点について資料紹介を行い、歴史的な位置づけを試みる。

2. おこうはん石造物群の概要

実測を行った88点中86点がさぬき市津田・大川にある火山の凝灰岩、いわゆる火山石を使用していた。石造物群の多くが火山石なのは当地のみならずこの地域周辺の特徴といえる。2点のみ火山石以外の石材があり、1点が高松市牟礼町八栗寺周辺の凝灰岩である八栗石であり、もう1点は砂岩である。砂岩製も周辺地域では稀に見ることができる。周辺地域で一定量を認めるのが宝光寺石造物群である。

次に種類を見ると大多数が五輪塔でごく一部宝篋印塔がある。石仏、宝塔、石幢等は皆無である。五輪塔、宝篋印塔で石造物群をなすのは周辺地域(若王寺の所在する東西に続く谷)で比較的に見ることができる。このようにおこうはん石造物群の様相はこの地域の石造物群の代表的なあり方を示している。

実測資料の掲載は石造物の種類ごとにおこなった。圧倒的多数が火山石であることから、火山石製の五輪塔、宝篋印塔の順で概要を紹介し、その後に非火山石製について確認していきたい。

3. 石造物の報告

(1) 火山石製五輪塔

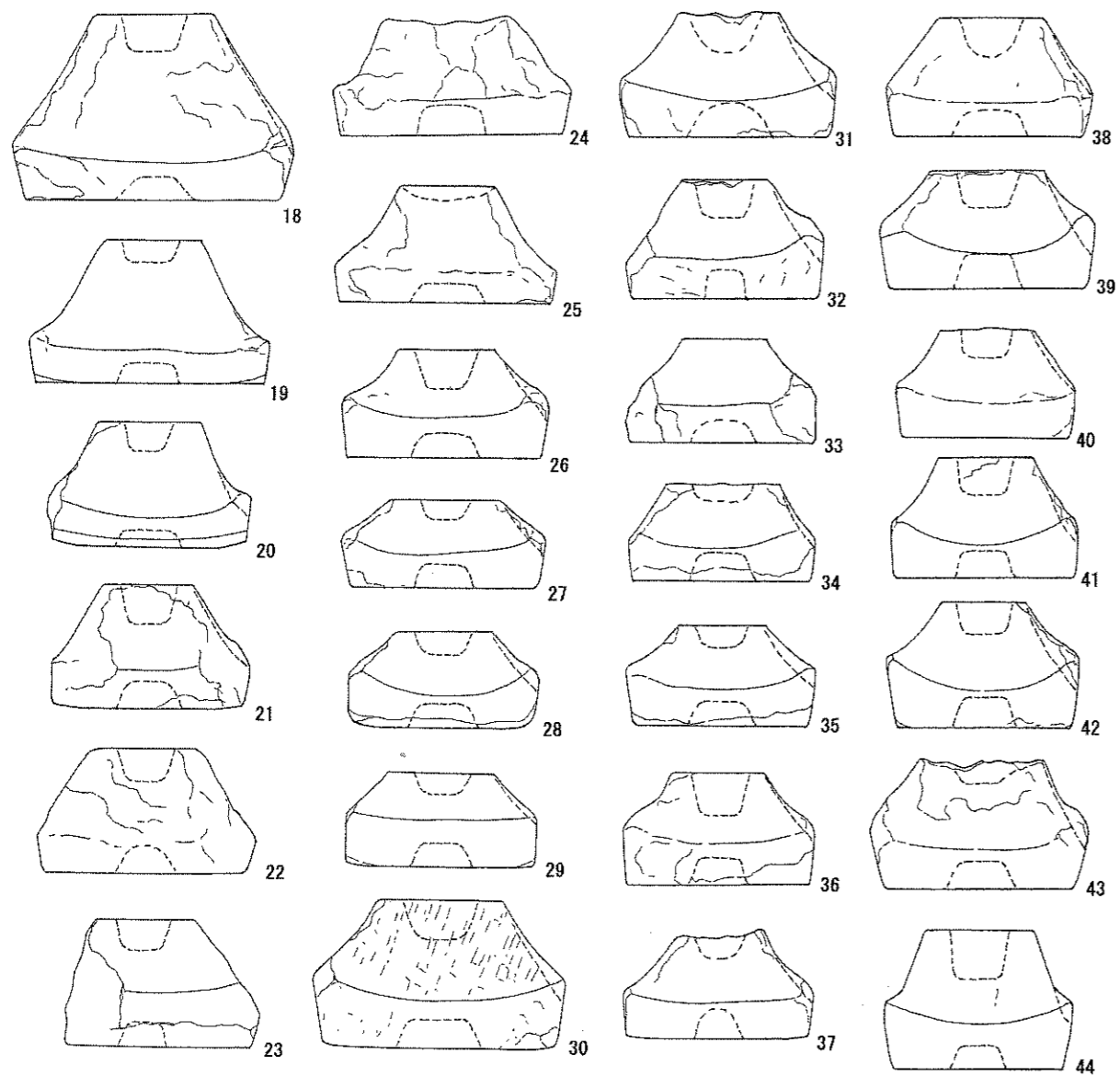
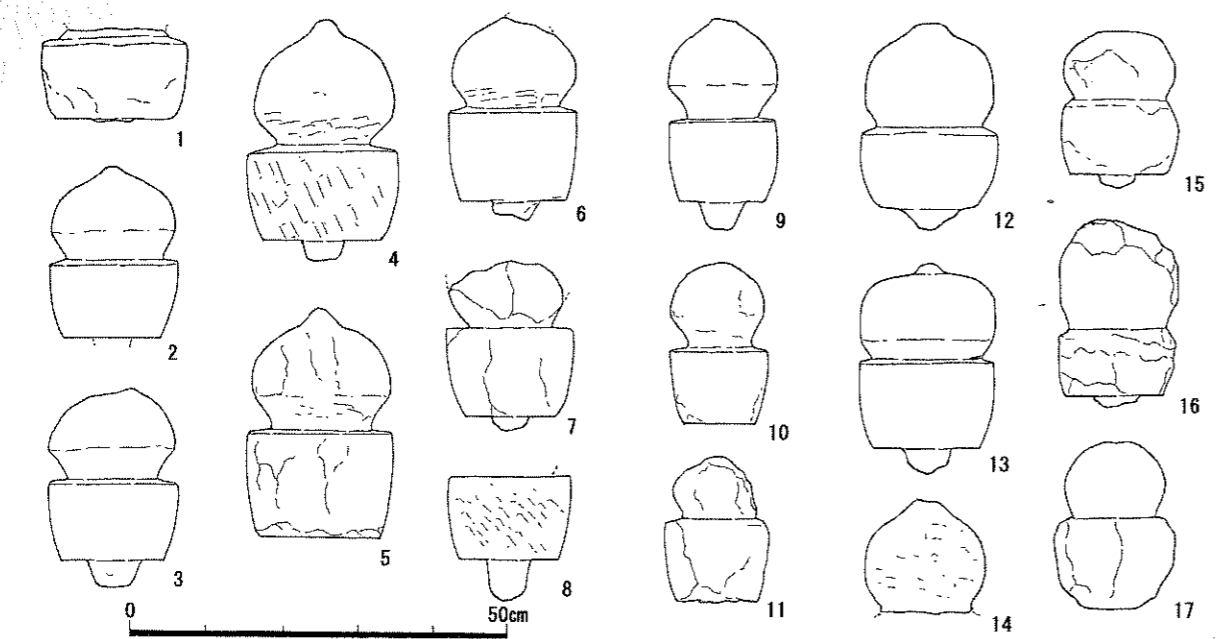
五輪塔で最も数が多かったのが火輪である。27点あり、27基以上の五輪塔の存在が想定される。以下では部材ごとに見ていこう。

① 空風輪

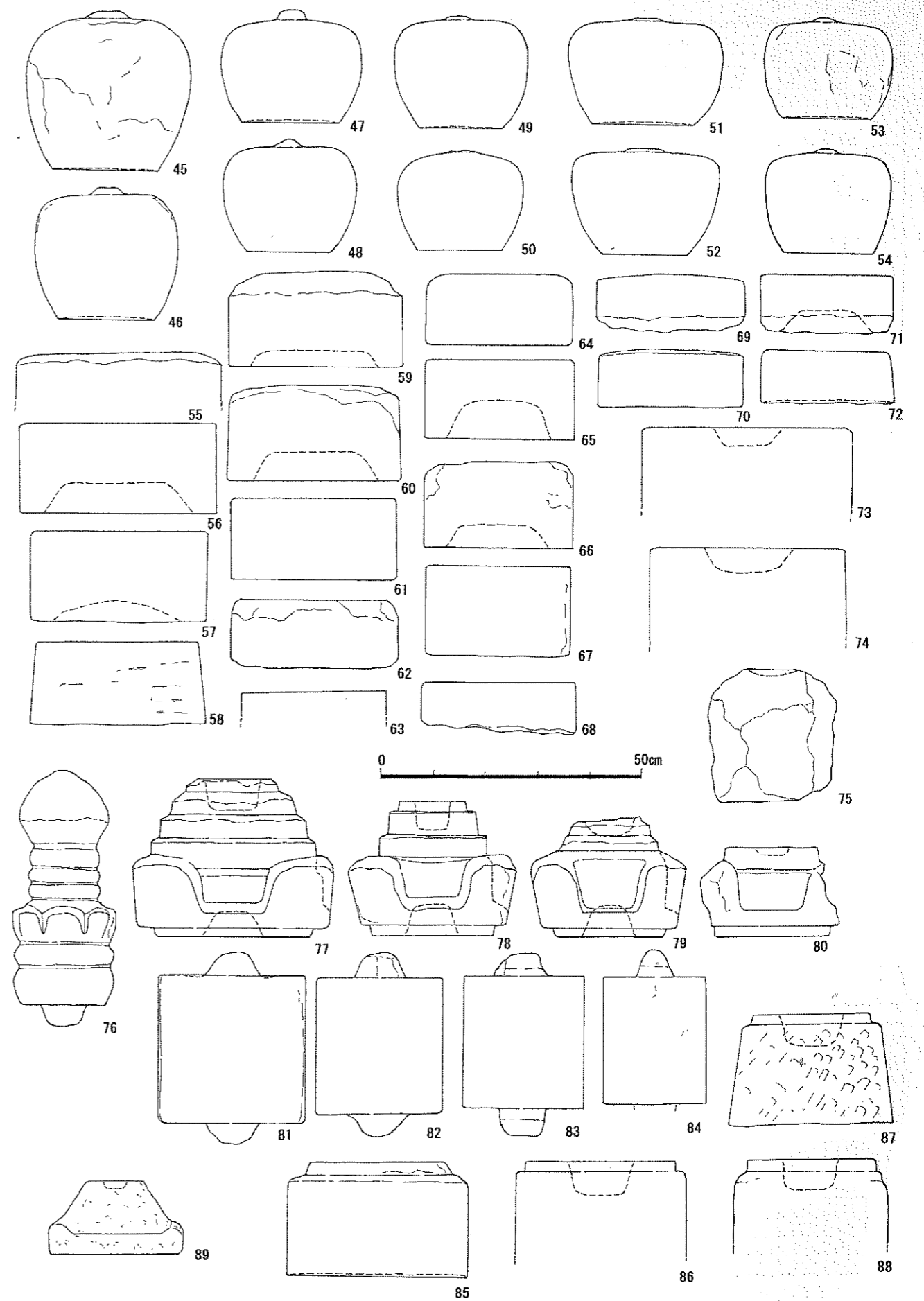
17点確認した。高さは大型例(No.4・5)で30cm、多くは20cm前半である。空輪は最大幅が下方にあるものが多いがいくつかは筒形を呈している。風輪は縦長で、立ち上がりの曲線のゆるやかなものが多い。

② 火輪

27点確認した。高さ15~20cmが20点、幅26~32cmが22点あり、石造物群は小型品が多い傾向にある。最も大型のもので高さ26.5cm、幅40.5cmである。小型品の多くは高さが幅の半分程度(高さ/幅が0.5代)になっている。一方、高さ/幅が0.6以上となる縦長の事例は大型品か一定量の小型品にある。この一定量の小型品は軒厚が隅部に向って大きくなる事例が多い。軒は下端部の反りがほとんど認められない。軒厚は5cm代が多く19点を認める。



第3図 おこうはん石造物群実測図 (1) (1/10)



第4図 おこうはん石造物群実測図 (2) (1/10)

番号	高さ	風輪		空輪高	風輪高	備考
		上幅	下幅			
1		19.5	15		10.5	空輪欠損
2	23	17	12.5	12.5	10.5	ホゾ欠
3	24	17	13.5	13	11	
4	30	20	15	17	13	工具痕顕著
5	30	19	15	15.5	14.5	ホゾ欠
6	30	17	14	17.5	12.5	
7		17	11.5		12	空輪一部欠
8		16	12.5		11.5	空輪欠損
9	24.5	14	10.5	13.5	11	完存
10	21	13	9.5	8	5	ホゾ欠
11		14	11		11	空輪一部欠
12	25	18	12	14	11	
13	24.5	18	13.5	12.5	12	
14				14.5		風輪欠
15	19	15.5	12.5	9	10	風化つよい
16	23	15.5		14	9	
17	22	16	10	5.5	11.5	ホゾ欠

番号	高さ	幅	高さ/幅	軒厚	上端幅	下端幅
18	26.5	40.5	0.65	5.5	17	37
19	20.5	34.5	0.59	5	13.5	32.5
20	18	29.5	0.61	4.5	15	28
21	18	29	0.62	5.5	13.5	27.5
22	18	31.5	0.57	5	14	27.5
23	18.5	33.5	0.55		14	31
24	17	34.5	0.49	5.5	17	31.5
25	17	32	0.53	5	14	30
26	15.5	29.5	0.53	5.5	14	28
27	12.5	29.5	0.42	5	16	27
28	17	31	0.55	5	16	28
29	13.5	27.5	0.49	7	16	27.5
30	21	36	0.58	6.5	18	33.5
31	18	31.5	0.57	5.5	14	28.5
32	17	28.5	0.60	6	13	27
33	15	28	0.54	6	12	26.5
34	14	27	0.52	5	16	25.5
35	14.5	27	0.54	5	12.5	24.5
36	16	27.5	0.58	6	13.5	26
37	15.5	27	0.57	5	12.5	26
38	17	29.5	0.58	5	15	27
39	17	31	0.55	5	16	28.5
40	16	26	0.62	5	13	24
41	17	27	0.63	5	13	26
42	18	28	0.64	5	12	25
43	18.5	31.5	0.59	5.5	17	26.5
44	20	27	0.74	6.5	15.5	24

番号	高さ	幅	高さ/幅	最大幅高	最大幅高/高	下端幅
45	29	30.5	0.95	20	0.66	20
46	23.5	27	0.87	17.5	0.65	18
47	19.5	27	0.72	12.5	0.46	18
48	20	25.5	0.78	12.5	0.49	15.5
49	21	25.5	0.82	14	0.55	16
50	18.5	24	0.77	12.5	0.52	16
51	20.5	29.5	0.69	14	0.47	18
52	20	28.5	0.70	17	0.60	16
53	18	24	0.75	13	0.54	17
54	18.5	24	0.77	14.5	0.60	17

番号	高さ	幅	高さ/幅	割り込み幅	備考
55		39			
56	17	37	0.46	28	
57	17	33.5	0.51	24	
58	15.5	33.5	0.46		台形 上端幅31cm
59	18	33	0.55	23	
60	18	33	0.55	23	台形 上端幅32cm
61	15	31.5	0.48		
62	13	31.5	0.41		
63		27.5			
64	13.5	27.5	0.49		
65	15	28.5	0.53	20	
66	16.5	28	0.59	19	
67	17	27.5	0.62		
68		29.5			下半部欠損
69	11	28.5	0.39		基壇の可能性あり
70	11	28	0.39		基壇の可能性あり
71	11	25	0.44	17.5	基壇の可能性あり
72	9.5	25	0.38		基壇の可能性あり
73		40			上端部にホゾ孔
74		37.5			上端部にホゾ孔

番号	高さ	幅	九輪数	備考
76	44	20	3	77の宝篋印塔笠部近くにあり

番号	高さ	幅	軒上段形の数	軒下段形の数	備考
77	30	38	5	1	下端部幅29cm
78	25.5	32	4	1	下端部幅23.5cm
79	23	29.5	4	1	下端部幅20cm
80		27.5		1	下端部幅22cm

番号	高さ	幅	高さ/幅	ホゾ幅	備考
81	28	28	1	10	
82	25.5	24	1.06	10	
83	25	23	1.09	8.5	現在笠77と組合う
84	24	19.5	1.23	7	現在笠78と組合う

番号	高さ	幅	高さ/幅	上端幅	備考
85	22	34.5	0.64	25	八栗石か大串石
86		32.5		28.5	
87	21	31	0.68	22	台形 表面工具痕
88		29		24	

番号	高さ	幅	高さ/幅	上端幅	備考
89	14	25.5	0.55	10.5	離れた2個体接合

単位はcm

表1 おこうはん石造物群計測表

③ 水輪

10点確認した。高さ18～21cmが8点、幅24～27cmが7点ある。高さ/幅が0.85を越える縦長のタイプは少数で大型品(No.45)に認められる。下端部は面をなして若干凹む。上端部は側面から曲線をもってそのまま上端部に至り面は形成しない。上端部中央には全てホゾが認められる。

④ 地輪

20点確認した。ただしNo.69～72は高さが低く基壇の可能性があり、また、No.73・74は上端部にホゾ孔が認められ、笠塔婆など五輪塔以外の可能性もある。確実に地輪なのは14点である。高さ15～18cm、幅27～33cmが多くを占め、高さは幅の約1/2の比率が多い。下端部には割り込みを有するものと平坦な面をなすものがある。また、側面形は方形が多いがごく稀に台形がある(No.58)。

(2) 火山石製宝篋印塔

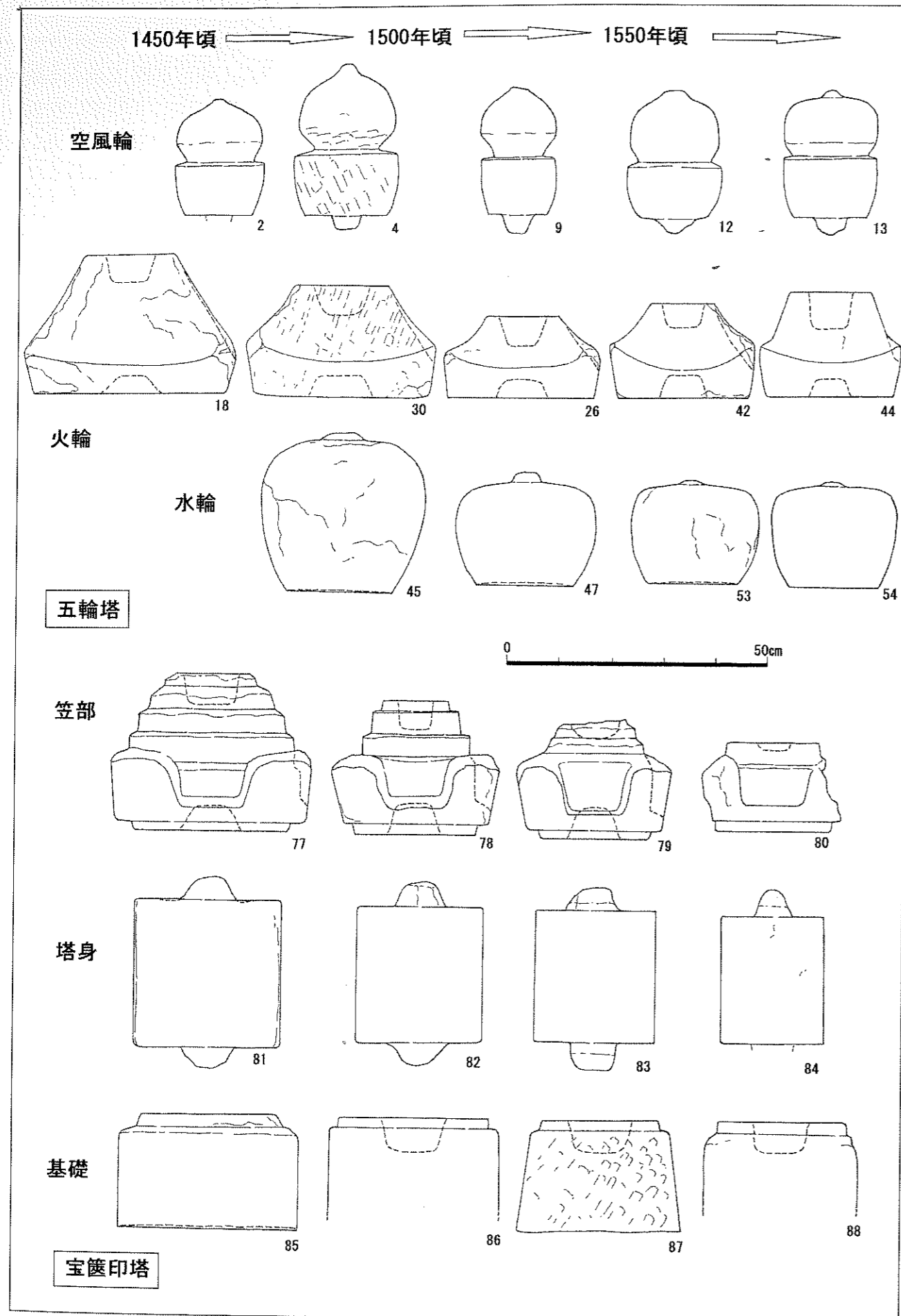
相輪1点、笠部4点、塔身4点、基礎4点(うち1点は八栗石製)が確認できる。よって宝篋印塔は5基程度が想定される。笠部、塔身、基礎ともに同形態、同法量はなく、各塔はそれぞれ時期差が想定される。五輪塔は27基以上が想定されるから五輪塔6基程度に1基の割合となる。集団(一族或いは地域集団)の中の最有力者の供養塔として宝篋印塔が選択された可能性があり、そのように仮定すると5世代分の造塔が想定される。

(3) 砂岩製五輪塔

多くの火山石に対して八栗石製・砂岩製はそれぞれ1点のみである。ここでは砂岩製について詳細を見ていこう。89は小型の五輪塔火輪で2片が接合関係にある。高さ14cm、幅25cmの小型品で上端部から直線的に屋根が下る。軒は垂直に立ち上がり、軒は隅部でやや突出する。下端部にホゾ孔は認められず、軒反も見られない。火山石製とは形態や製作技術で相違点が多く異なる石工による製作が想定される。

4. 年代的な位置づけ

上記では石造物の具体相を見てきた。次に年代的な位置づけを試みる。まず五輪塔に注目したい。五輪塔の部材の中で時期的変遷を明瞭に示すのが火輪である。当石造物群の中で最も古く位置づけられる火輪はNo.18である。火輪の中で最も大型で縦長である。火山石製は14世紀代に縦長の事例が多く、東かがわ市内ではその代表例として市指定文化財に登録されている坂元五輪塔を挙げることができる。15世紀前半の製作が想定されるさぬき市長尾極楽寺住職隆珍塔(1421年没)も依然として縦長の形態を保ちわずかな軒反を認める。No.18は縦長ではあるが軒反りはほとんど認められず、また、法量も少し小型になっている。これらから15世紀前半の隆珍塔に後出する次の段階、15世紀中頃を想定したい。No.18以降、火輪の高さは幅の1/2近くまで低くなる。また、法量は小型化を進行させる。No.30⇒26の変遷が想定される。なお、石造物群の中で最も多いのがNo.26に類似した形態である。16世紀が想定される。そして、形態変化は再び高さを増し、



第5図 五輪塔・宝篋印塔の変遷 (1/10)

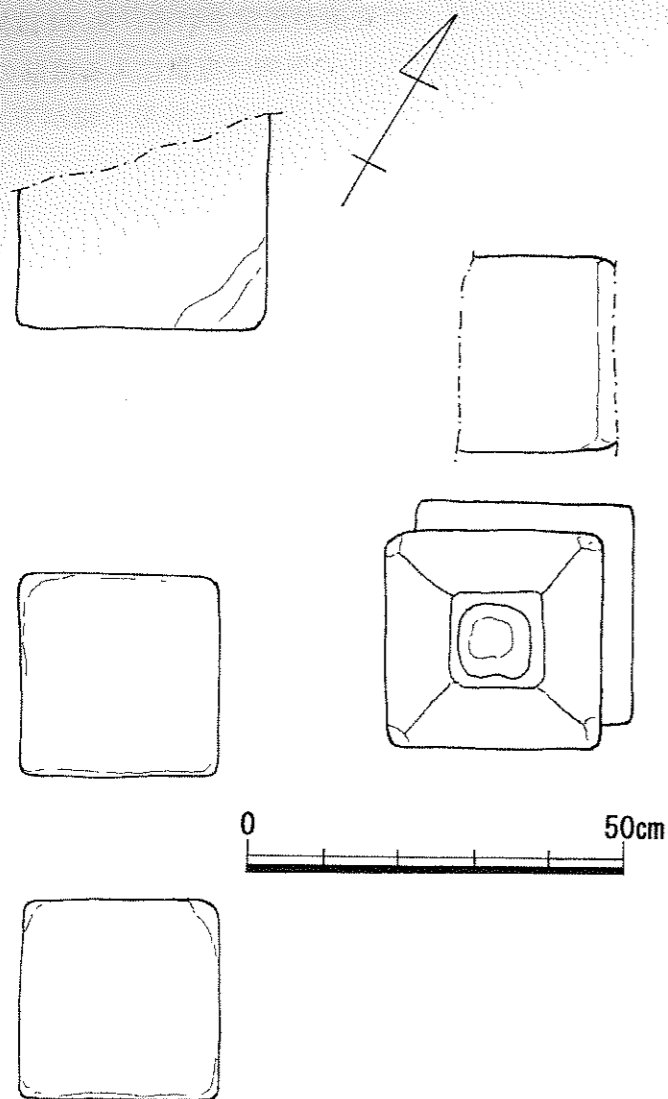
軒は主軸付近から四隅に向って厚くなっていく。No. 42 ⇒ 44 への変遷が想定される。No. 44 は屋根が直線的に下り、隅部付近で明瞭に屈曲する形態となる。No. 42・44 の展開は近世に入る直前の16世紀後半頃に位置付けたい。五輪塔のその他の部材の変遷として、空風輪は空輪最大幅が下方に位置する中世前半段階以来の伝統的な形態から空輪が筒形を呈する変遷が想定される (No. 2・4・9 ⇒ 12・13)。東かがわ市内には16世紀中頃以降に外来の特徴を有する砂岩製石造物がわずかながら造塔されるようになるが、これらの影響が想定され、変遷時期は16世紀中頃以降が想定される。水輪は事例が少なく変遷は判然としないが、側面から上端部に至る曲線のなめらかなNo. 45・47 からやや肩部が張り筒状を指向するNo. 53・54 への変遷を想定したい。水輪が17世紀初頭にかけて筒形になるのは全国各地で認められる傾向であり、県内においても17世紀初頭の生駒家墓塔のように天霧石製五輪塔には筒形化が明瞭に観察できる。当石塔群の水輪は明瞭とはいえないが、筒形化への指向は看取される。よって、No. 54 は16世紀後半頃を想定したい。以上、五輪塔からは15世紀中頃の出現、16世紀の盛行、そして終焉として16世紀後半が想定される。

次に宝篋印塔に注目する。前節でも紹介したが宝篋印塔は5基程度が想定され、各塔は法量・形態が異なり時期差として捉えられる。火山石製の宝篋印塔の変遷はこれまで松田が検討を試みている (松田 2008・2011)。変遷は小型化、段形の省略化として捉えられる。笠部で最も大きいNo. 77 は高さ 30 cm、幅 38 cm で軒上の段形 5 段、軒下の段形 1 段である。こうした特徴は松田 2011 の編年の第 4 段階と第 5 段階の間に位置付けられる。時期的には15世紀中頃である。次のNo. 78・79 は共に軒上段形 4 段と 1 段省略され、隅飾は段形の下から 1 段目に取りついている。このタイプは第 6 段階として位置付けられ、16世紀前半～中頃が想定される。なお、No. 78 と No. 79 を詳細に比較すると、No. 79 の方が軒上から 1 段目上端までの高さや隅飾が高くなり、一方で軒は低くなっている。隅飾が低く、軒の厚い No. 78 はむしろ No. 77 に近似する。つまり、No. 77 ⇒ 78 ⇒ 79 で漸移的な形態変遷が看取され、15世紀中頃⇒16世紀中頃の中での変遷が想定される。続くNo. 80 はより小型化を指向するが残存状態はよくないため、小型化以外の具体的な変遷を窺うことはできない。なお、引田萬生寺に所在する宝篋印塔はNo. 79・80 よりもさらに形態変遷の進んだ特徴が窺うことができ、No. 79・80 は16世紀中頃を下限として捉えたい。

以上、五輪塔、宝篋印塔からは、15世紀中頃～16世紀の石造物の年代が指摘でき、その多くは16世紀前半であることが指摘できる。

5. おこうはん石造物群の歴史的意義

全国的に中世石造物の大量生産が本格化するの15世紀後半からで、五輪塔、宝篋印塔が墓塔として展開する。この時期は日本社会全体が乱世の戦国の時代に突入する頃で、こうした社会変化に関連して石造物の需要は高まっていく。乱世を生き抜く地域の有力者が自発的に石造物造塔を開始する時代が到来したといえる。おこうはん石造物群の場合、30基近い五輪塔の中で宝篋印塔はわずか5基程度であった。そして、宝篋印塔は世代ごとに1基ずつ造塔されるといった展開が考えられた。石造物の種類によって階層性が表現されており、階層性をもった集団の供養塔群或いは墓塔群として捉えられる。当地は鶴ノ田尾峠に行く出口に当たる。逆から見れば盆地への入口部である。おこうはん石造物群は交通の要衝に位置しているといえる。今回は石造物群周辺



第6図 原位置を留めた地輪 (1/10)

さいごに

まだまだ課題が多く残るがひとまず現状の石造物事例が想定される問題をまとめてきた。石造物造塔の時期と階層性が表現された石造物群の性格が明らかとなってきたと思われる。最後になったが、今回の調査の参加者を記して本稿の結びとしたい。(文責 松田朝由)

木村篤秀、木村守、富山経子、松田朝由、三好弘昭、水野惇 (敬称略、五十音順)

〈参考文献〉

- 松田朝由 2008 「東かがわ市内の火山産宝篋印塔」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第5号 東かがわ市歴史民俗資料館
- 松田朝由 2009 「坂元の五輪塔について」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第7号 東かがわ市歴史民俗資料館
- 松田朝由 2011 「三木町王子権現石造物群と二条城跡宝篋印塔」『文化財協会報』平成22年度特別号 香川県文化財保護協会
- 山西仁・松田朝由 2007 「若王寺周辺の石造物」『赤澤記念財団奨励助成金 若王寺所蔵大般若波羅蜜多經調査報告書』東かがわ市歴史民俗資料館叢書2

の限定された調査であったが、今後はもう少し広い範囲で当地にどのような機能の施設が所在したか検討していく必要がある。

伐採作業の結果、おこはん石造物群のほとんどは原位置を留めておらずバラバラになったものを集積した状態であった。ただその中で整然と並べられた地輪の並びを確認したことは大きな成果となった。地輪が尾根に軸を合わせて一定の間隔をあけて並列している状況が確認された(第6図)。今回把握した石造物残欠は火輪に比べて地輪数は圧倒的に少なく、多くが土中に原位置を留めて並んでいるのではないかという期待が高まってきた。



写真1 全景 (北から)



写真1 全景 (西から)



写真3 原位置を留めている可能性のある地輪の並び



写真4 宝篋印塔（笠 77、塔身 83、基礎 86）



写真5 五輪塔、宝篋印塔の現状

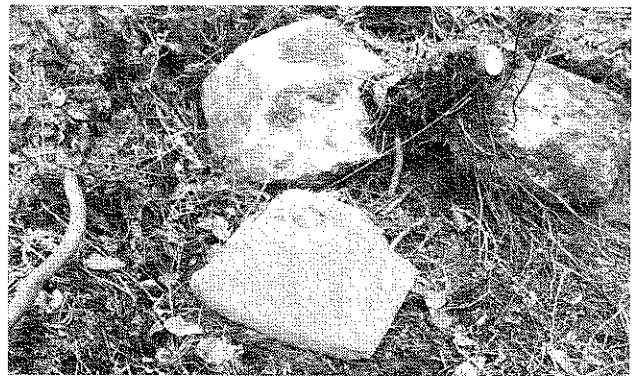


写真6 砂岩製五輪塔

数字は実測図番号